

第2回海業推進会議グループワーク

議論の中で出てきたアイデアのとりまとめ

【Aグループ】「愛南町海業 SDGs の実現」（海ごみの再資源化による美しい海の実現、水産物残渣等の肥料化による海と山の循環構造の実現など）

<水産物の残渣を肥料化して、海や山に還す町内循環の取組>

魚油の抽出と活用

・斃死魚から魚油を抽出して養殖魚の餌に混ぜる。現状、八幡浜の業者に数百万円で委託契約をして処理してもらっている。

⇒愛南町内に再資源化の施設があれば町内循環となる。絞ったカスの身や骨は肥料としても活用できる可能性がある。臭いが出るので場所が課題。費用対効果の検討の可能性はある。

水産物残渣やカキ殻を活用した配合肥料の生成

・現状、魚の頭と骨の煮カスの乾燥したものやカキ殻を粉砕したものを60%~70%、残りは化学肥料を入れて配合肥料としている。愛南の魚だけでは足りないので、高知から買い取っている。

⇒毎年150トン出てくるカキ殻を2cm程度まで粉砕して肥料化するスキームを町内で確立済み。今後、肥料として活用できるか、町外にも販売するかの検討に向けて、成分分析が必須。肥料価格が高騰しているので、経済的にも可能性があると考えられる。

・先行する広島では、行政もタイアップして陸上の施設で水に付けて処理するため、良質な粉末となる。

・塩抜きをするヤードや施設が課題。2か所あると、塩抜き→粉砕のサイクルを回すことができる。今回の漁港漁場整備法の改正を踏まえて、新たに漁港のどこかでできないか。

その他

・落果した果実を養殖餌料に混ぜてブランド化するなどの取組はできないか。

・規格外や訳あり商品を過剰な包装をせずに町内で販売することも町内循環と環境配慮になる。

・ぜひ農業と水産業の人たちが繋がっていく会があると良い。

【Bグループ①】「各施設・アクティビティ同士のネットワーク構築」（来訪者のアフターケアの充実など）

宿泊をベースとしたネットワーク構築

- ・地域共通のアクティビティと宿泊をセットにして地域全体で繋ぐ。そのようなチケットをふるさと納税で販売する。
- ・宿泊業者、飲食業者、アクティビティ関係者のネットワークを作る。移動に関する情報など、情報の一元管理化、システムの構築。
- ・例えば、「愛南町 ○月○日から○泊 ○人」と入れると対応できる宿を教えてくれるシステム。宿泊客の融通をするネットワークづくり。会費の無い組合を作ることが入口になり得る。
- ・コンシェルジュ的な存在が必要であり、その人を雇うための利益を生む仕組みが必要。

人材確保としてのネットワーク構築

- ・三津浜では都会の人材と地域企業をつなぐ会社が入っており、愛南でも同様の仕組みを作って、人材の確保を図ることができるのでは。
- ・ある業種がアイドルタイムのときに、ある業種がビジータイムであれば、その業種へお手伝いを派遣する。季節的な閑散期と繁忙期とで振り分ける方法もある。ワーキングホリデーも取り込む。
- ・松野町では、派遣人材を振り分ける協同組合があり、町が主導してまとめている。一年を通して雇える業界が無い代わりに、人手が足りない所に振り分ける仕組みが構築されている。

その他

- ・海の免許合宿。小型船舶免許やスキューバダイビングのライセンスを取れる町にする。
- ・インバウンドに対応するためにも宿泊施設がほしい。空き家対策と組み合わせでできないか。商店街や石垣の里にある古民家や空き家を改修して民泊にすることも考えられる。ただし、空き家情報の管理は町がやる必要がある。
- ・シンボルが欲しい。
- ・宿泊に関するデータを集める必要がある。

【Bグループ②】「各施設・アクティビティ同士のネットワーク構築」（来訪者のアフターケアの充実など）

ターゲットについて

- ・磯釣り客が自分で判断して予定していた業者とは違う地域の業者に移動している例はあるが、業者同士が繋がっているわけではない。ヘビーユーザーは自身のリテラシーが高いため、議論の対象にする必要はないと思われる。

ネットワークの内容について

- ・マリンアクティビティを体験したいライトユーザーが来て、悪天候で体験が出来ない場合に、できれば類似の代替案を案内できれば良いが、現状は営業しているかどうか不明。
⇒シーボーンアートや山の体験、食や温泉など、同業者でなくても良いと思うので、リピーターを増やしていくようなシステムができると良い。間に入るアクティビティハブ業者は必要。
- ・必ずしも観光協会がしなければならないわけではないが、利用者に選択肢を提供する総合的な観光案内が必要。アナログである必要はなく、Web情報のまとめサイトで良い。今ならLINEやChatGPTなどのAIでもある程度可能と思われる。各業者がSNSで発信していくことが大事。また、自分の事業者がNGだった場合に、他の情報に誘導する発信ができると良い。どのようなホスピタリティ、手厚さを用意できるかという視点を大切にしたい。
- ・逆にオススメ情報をいかに提供するかという視点も必要。聞かれたときに案内するWebサイトは必要になってくる。偏りが無いようにするのが難しい。民間なら契約した相手とだけつながることができるので比較的簡単。魚の水揚げ情報を提供できるような仕組みを付加するのも良い。

拠点施設について

- ・天候に左右されない全天候型の観光目的が必要。図書館や水族館などの屋内施設や釣り堀、検討されている10億円の海洋センターなど。「今度は晴れた日に来ようね」と言ってもらえる体験を用意したい。

【Cグループ】気軽な海体験の提供（人工ビーチの造成など）

人工ビーチについて

- ・テーマに沿って考えると、白い砂浜の上でビーチバレーをするような人工ビーチを整備することを想像している。
- ・北海道のビーチでは、入場料を 100 円支払って渡されたゴミ袋にゴミを入れて帰るという仕組みがあった。海に入る前にゴミ拾いも楽しんでやる。ライフセーバーがいて、事前に撒いた貝や天然の魚が泳いでいる。無料でなくて良い。

⇒台風のことを考えると人工ビーチを整備しても一瞬で砂が無くなるため、実現は非現実的。シュノーケリングやダイビングといった体験をベースに、人工ビーチの整備は不要。

気軽な海体験のイメージについて

- ・愛南町の気軽な海体験としては、まずはシュノーケリングからでは。海を知る人が常駐して、機材レンタルとセットでシュノーケリングなどを教えてもらうことも第一歩になる。
- ・また、船でアプローチするような天然のビーチを、ゴミ拾いしながら子供と一緒にみんなで整える。映えスポットにもなるというストーリーがありえる。
- ・民間が入ってきて稼いだりビーチを整備したりすることも重要。
- ・釣り堀のようなスポットを作るというのもありかもしれない。

気軽な海体験に向けた整備について

- ・冬の北西風が遮られる須ノ川は波が立たない上、ダイビングスポットでもあり、ポテンシャルがとても高い。陸側が整備されて連携できると良い。
- ・小さい子供や中学生が気軽に遊べる場所となるよう、ある程度整備された場所も必要。入口の海底にタイルを敷くなど。
- ・船でのアプローチができる天然の砂浜もあり、一部は陸からのアプローチもできる。そういったところにバスでもアクセスできるよう、道を整備することで利用の可能性が広がるのではないかな。

その他

- ・愛南町の海でのダイビングは、釣りと並んで全国的にもあこがれの場所。来づらいのに来てくれる。ダイビングライセンス保持率日本一の町を目指すというのもありかもしれない。誰に聞いてもダイビングを紹介できる町というイメージ。

【Dグループ】観光ガイドの育成と交流促進に向けた取組（シルバー人材の活躍など）

観光ガイドのイメージ

- ・会話を通じて聞く人を楽しませる「語り部」を育てる。石垣の里や紫電改、昔の水産業や日常の暮らしなどの歴史や文化、食などを伝える。人間の生き方や望みを達成するストーリーなど、細かなところまで説明すると魅力がより伝わる。
- ・内容を知っている人材を発掘して、内容を細かく分解（魚だけでも、獲り方、釣り方、捌き方、料理法などそれぞれの専門が存在。石垣の里も、歴史・経緯の他、積み方など。）して手分けして伝えても良い。
- ・伝える主体は、小中高生などが総合的な学習などで勉強し、教育の一環とすることも考えられる。英語で伝えることも考えられる。シルバー人材が日常の暮らしを伝えるなどの活躍も考えられる。
- ・お客さんにガイドを評価してもらい仕組みを導入することで、ガイド役のモチベーションアップにつなげる。

観光ガイドを起点とする交流促進に向けたイメージ

- ・ガイドする内容をメニュー化して、相談受け・調整・案内するコンシェルジュ的な人、コントロールセンター的なところが希望に応じたルートを作成することや、来訪者自らが組み合わせて作る着地型の観光を展開する。
- ・メニューは、季節ごとに構成したり、小中高生がガイドしたりするなど、時期や時間などの限定メニューもあると良い。
- ・伝える場所は、新しくインフォメーションセンターを作ることも考えられるが、廃校を水族館にする案や紫電改、市場食堂、石垣の里、あけぼの荘、ゆらり内海など今ある集客の場所を活用することで新たな投資は要らなくなる。

メニューの具体的なアイデア

- ・釣りのビギナー向けに、釣り方を教えるワークショップを導入してリピーターの増加を目指す。
 - ・1週間かけて石垣を積む体験など、マニアや研究者を対象としてコアな内容を伝えるメニューも考えられる。
 - ・スタディーツアーとして勉強するために専門家を呼ぶ、釣り好きを集める、有名人やインフルエンサーを呼ぶなどが考えられる。
- ⇒これらアイデアをどのように持続させていくか、どのような体制で実施するのが課題。全てはできないので、選ばなければならない。さらに、一人ではできないので、推進会議とは別に海業発の自分たちで検討したいというチームができて、行政からもサポートや見守る体制があると動きやすい。